

聖書：コリント人への手紙第二 13：11～13

説教題：最後の勧めと祝祷

日時：2025年4月13日（朝拝）

コリント人への手紙第二の最後となりました。昨年の9月から始めて約7カ月半かけて、ここまで一緒に読むことができましたことを感謝いたします。この最後の部分ではまず短い命令がいくつか重ねられています。これはパウロの手紙にしばしば見られるものです。先の第一コリント最終章でも結びの部分で「目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。雄々しく、強くありなさい。一切のことを、愛をもって行いなさい」と記されていました。またテサロニケ人への手紙第一でも最終章の5章16節以降で「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことにおいて感謝なさい。・・・御霊を消してはいけません。預言を軽んじてはいけません。・・・すべてを吟味し、良いものはしっかり保ちなさい。あらゆる形の悪から離れなさい」と記されていました。今日の箇所でもまず5つの短い命令が重ねられています。これらはバラバラのものと言うより、宛先の教会にふさわしい内容のものであると考えられます。コリント教会の中には偽使徒、偽教師たちと一緒にあってパウロを批判し、見下し、拒否する人たちがいました。自分を誇る偽教師たちに倣って自分を持ち上げ、自慢したり、誰が一番すごいかと議論し、党派を作り、争う傾向が強くなりました。ですからパウロは12章20節で次のような懸念を述べていました。「私は心配をしています。そちらに行ってみると、あなたがたは私が期待したような人たちでなく、私もあなたがたが期待したような者でなかった、ということにならないでしょうか。争い、ねたみ、憤り、党派心、悪口、陰口、高ぶり、混乱がありはしないでしょうか。」このようなコリント教会に教会一致のための勧めをパウロは語っていると捉えることができます。

「兄弟たち」と呼びかけてパウロはまず「喜びなさい」と言います。普通私たちは喜べる状況があれば自然に喜ぶのであって、喜びなさいと命じられるのはおかしいと思うかもしれません。しかし聖書は色々な箇所でそのことを語っています。特に思い起こされるのは「喜びの手紙」とも言われるピリピ人への手紙3章1節や4章4節です。パウロは4章4節で「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい」と言いました。ここに喜びの根拠が語られています。それは「主にあって」ということです。キリストに結ばれ、キリストの救いにあずかっている者としてです。

キリストと結ばれている者は最後のさばきから救われています。罪の赦しを受け、聖なる神に受け入れられ、その子どもたちとされています。永遠のいのちを持ち、地上の信仰生活を通してきよめられ、やがて完全に贖われた天の御国に住む者たちとされています。このことを思っいつも喜びなさい！とされています。コリント教会にはこの喜びが欠けていたかもしれません。むしろそこには争いが満ちていたかもしれません。そうであるなら彼らは福音に焦点が合った生活をしていなかったということになります。やがて入る天国は喜びで特徴づけられるところです。ですからその救いを経験している者たちが集まる所には喜びがその特徴となって現れていなければなりません。この喜びが支配的であるところに地上の様々な問題や争いを乗り越えるカギがあります。言い換えれば、これは福音に生きるということと同じです。

二つ目の命令は「完全になりなさい」。これと同じ言葉は9節に出て来て、そこでも触れた通り、「回復される」という意味の言葉です。ペテロたち4人の漁師が主の召命を受けた時、舟の中で網を繕っていたと言われていた時の「繕う」という言葉と同じです。本来の状態に戻す、修復するという意味です。つまりコリント人は破れかけていました。個人的にも、共同体的にも。その彼らが修復されるように、本来の状態になるようにということです。

三つ目は「慰めを受けなさい」。この手紙は神の慰めを語るところから始まりました。1章4節でパウロは「神は、どのような苦しみのときにも、私たちに慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます」と言いました。その神の慰めを豊かに受ける者でありなさい、ということかもしれません。しかしこの受身形で訳されている言葉は「互いに慰め合いなさい」「互いに励まし合いなさい」と訳すことも可能です。この5つの勧めは教会の一致に関心があるとすれば、そのように取る方が良いかもしれません。彼らは互いに慰め合い、また励まし合うべきです。福音の真理に基づき、主の救いを指し示し合うことによってです。

四つ目は「思いを一つにしなさい」。これは色々な考え方を認めない、多様性を否定するというものではありません。クリスチャンの一致は言うまでもなくキリストにある一致、キリストを思う心における一致です。その根本的なところにおいて私たちは一つであるはずですが、ですからこれは言い換えれば重大なこととそうでないことを

区別するという点でもあります。細かい点では見方が色々あるかもしれませんが。しかしそういう点を大きく取り上げて互いに仲違いし、分裂するようではサタンが喜ぶだけです。私たちはキリストに感謝し、キリストにすべての栄光を帰したいという思いにおいて一つであるはずで、その中心的なことを絶えず大事にし、細かい点では他の人の意見や見方に良く耳を傾けるという謙遜が必要です。二義的なことで喧嘩をすることがないように。

そして五つ目は「平和を保ちなさい」。エペソ人への手紙 4 章 3 節に「平和の絆で結ばれて、御霊による一致を熱心に保ちなさい」とあります。注目すべきは一致を作れとは言われていないことです。一致を保ちなさい。つまり一致はすでに与えられています。それを壊さず、尊ぶようにすべきなのです。平和を考える上での基礎は神との平和です。私たちはイエス・キリストを通して神との平和をいただいています。またその平和は私たちの横の関係にも広がるものです。この平和を感謝して保ち、尊ぶように歩むのです。

「そうすれば、愛と平和の神はあなたがたとともにいてくださいます」とパウロは言います。ある人は人間の行いに基ついで神の祝福が与えられるのか？と思うかも知れませんが、そういうことではありません。先に見た 5 つの命令はいずれも神の恵みを受けてこそ可能なものです。キリストの救いを受けてこそ喜びの生活があり、回復の歩みがあり、互いに慰め励まし合う生活、思いを一つにする生活、平和を保つ生活があります。しかしそこに私たちが生きる時、愛と平和の神が豊かにともにいてくださるというのも本当なのです。イエス様はある箇所です。手の萎えた人に向かって「手を伸ばしなさい」と言われました。直してくださるのは神です。しかしだからと言って神は私たちがただ受け身にはされません。「手を伸ばしなさい」とイエス様は命じられました。その言葉を受けて彼がイエス様に信頼し、自分の手を伸ばそうと応答したところに、その祝福は実現しました。この教会一致の勧めも同じです。教会の一致は神のみわざだと言って自らは何の努力もせず、むしろいい加減な気持ちで、そこにある平和を壊すような歩みをしてはならないのです。そうではなく、このパウロの 5 つの勧めをそれぞれが心に留めて行うのです。そうするところに愛と平和の神はともにいてくださり、その臨在と祝福は豊かにその教会に満ち溢れることとなるのです。

続く 12 節でパウロはもう二つのことを述べます。一つは「聖なる口づけをもって

互いにあいさつを交わしなさい。」 同じことは I コリント 16 章 20 節やローマ書 16 章 16 節でも言われています。ここで「口づけ」と言われているのは、これが当時の文化において相互の愛を表現する方法だったからです。ですから私たちは自分たちが生きている時代や文化の中で適切な方法でこれを行えば良いのです。表現方法は色々でも、挨拶を通してお互いへの愛を積極的に表し合うべきであるということです。ですから教会の中に、あの人には挨拶したくないという人がいてはなりません。形だけすれば良いということではありませんが、心が表れるような挨拶を互いに交わすべきです。パウロはこうしてコリント人に教会は互いに愛し合う神の家族であることを確かなものとするようにと命じています。

また二つ目に神の家族は一つの地域教会に限定されないことが、この節後半に記されています。「すべての聖徒たちが、あなたがたによろしくとっています。」 これはパウロがこの時にいたマケドニアの教会からの挨拶と考えられます。教会は一つの地域を超えるものです。他の地域にある教会も主にある同じ一つの教会です。そのことを感謝し、その交わりを尊ぶべきことを、このパウロの言葉は示しています。

最後 13 節に祝祷が記されます。パウロの手紙も見られる祝祷で一番多いのは「主イエスの恵みがともにありますように」というもので、これはローマ、I コリント、ガラテヤ、ピリピ、第一・第二テサロニケ、ピレモン書に見られます。また「主」への言及がなく、ただ「恵みがありますように」という祝祷もあります。エペソ、コロサイ、第一・第二テモテ、テトス書などがそうです。それに対してこの第二コリントだけが三位一体の神の名を用いた祝祷となっています。そしてこれが今日の私たちの礼拝における祝祷の言葉となっています。手紙の最後が人間への言葉で終わらず、祝祷で終わっていることには大きな意味があると思います。それは手紙で言われたことを実行するための望みは主にあるということです。それをさせてくださる力は神にあるということです。ですからこの神に祈り、神により頼み、希望をもって手紙で言われたことに取り組んで行くべきということになります。

パウロはまず「主イエス・キリストの恵み」と言います。パウロは 8 章 9 節でこう言いました。「あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。」 富んでおられた

方、神である方が私たちのために貧しくなり、ご自分をへりくだらせて十字架の犠牲を払い、私たちを救い、富ませるための祝福を勝ち取ってくださいました。この主の恵みにあなたがたが益々豊かに生きる者であるようにとパウロは祈ります。この主の恵みに感謝して生きるとは、自分自身も主に倣ってへりくだり、仕える道を進むべきであるということも意味することをパウロはこの手紙で語って来ました。主はそういう歩みにも私たち一人一人を召しておられます。

二つ目は「神の愛」。ある人は順番がおかしくないか？神が第一位に来るべきではないか？と思うかもしれませんが。しかしこれは組織神学の論文ではありません。これは私たちが経験する順序で書かれていると考えられます。イエス様はヨハネの福音書 14 章 6 節で「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません」と言われました。私たちはそのようにまずキリストの恵みを知ります。そしてそのキリストを通して神の愛を知る者となります。パウロはこの手紙の 5 章 18～21 節で、すべては神から出ていること、神がキリストを遣わし、その方を私たちの代わりに罪とし、その方にあって私たちをご自分と和解させてくださったことについて書きました。神が私たちの救いのために御自身のかげがえのない一人子さえも与えてくださいました。この神の愛を知り、この神の愛に豊かに生きる者であるようにとパウロは祈ります。

そして三つ目に「聖霊の交わり」とあります。これは聖霊が与える交わりを意味していると思われます。誰との交わりでしょうか。聖霊は何と言ってもキリストと私たちを結ぶ方ですから、それはキリストとの交わりであり、またキリストを通しての父との交わり、神との交わりと言えます。と同時に聖霊は横に広がるクリスチャン同士の交わり、聖徒の交わりをもたらしてくださる方でもあります。I コリント 12 章 13 節に「私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました。そして、みな一つの御霊を飲んだのです」とあります。キリスト教信仰とはただ個人が神と向き合い、神との関係でだけ生きるものではありません。それは聖霊が作り出す共同体の交わりに生かされることでもあります。パウロは聖霊の交わりという時、神との交わりばかりでなく、この横にも広がる交わりのことを強く考えていたに違いありません。この祝福にあなたがたが豊かに生きる者であるように！と祈りました。

さてこの手紙の結果はどうだったのでしょうか。パウロはその後、マケドニアからさらに進んで、予告通り3回目のコリント訪問を果たしたことが使徒の働き20章2~3節から分かります。彼はコリントに3カ月滞在しました。そしてその間に、あのローマ人への手紙を書きました。そのローマ書を見ると、パウロがコリントで混乱に悩まされた形跡はなく、むしろ落ち着いた状況でかの偉大な手紙を書いたことが伺えます。そしてそのローマ書15章26節で、マケドニアとアカイアの人々の献金を携えて、これからエルサレムへ向かうことを述べていますが、このアカイアとはコリントを主とする地方のことです。つまりパウロはこの手紙でも述べていたエルサレムの貧しい聖徒たちへの献金についてコリント教会からの協力も得たことが暗示されています。その献金をエルサレムへ運んだ後、ローマへと向かい、そこからさらに西の果てイスパニアへの伝道へと遣わされたいとの志を彼は記しています。このことからすると、パウロのこの地方における働きは一区切りつけることができたこと、つまり彼のこの手紙の目的は達成されたこと、この手紙は功を奏したことが伺えます。この手紙は個人攻撃される中、パウロの牧会の心が披瀝された特殊な手紙、ある意味で激しい手紙でしたが、その彼の忍耐深い奉仕、取り組みは十分に報われたことを私たちは感じることができるのです。

今日の私たちにも、このコリント教会に似た点があるかもしれません。世の価値観を教会に持ち込んで、それで教会をかき回すということがあるかもしれません。キリストの十字架を嫌がり、もっと明るいこと、華々しいこと、心浮き立つようなことだけを強調し、大事にしようとするかもしれません。苦しみや仕える働きは低く評価し、なるべくこれに関わらないようにし、楽をして高い地位や祝福にあずかろうと願うかもしれません。そして自慢したり、党派心によって互いを比べることに熱心で、そのようなあり方を煽り立てる偽教師の教えに聞き入って、そちらを高く持ち上げようとするかもしれません。これらはすべて福音の理解が不十分であることに起因しているとして、パウロはこれまで福音を解き明かして来ました。イエス・キリストを信じ、そのキリストに従うとはどういうことかを身をもって示して来ました。その福音にしっかり立つことが、すべての問題の解決の道であるということです。

ですから私たちはこの祝祷を自分のためにも祈りたいと思います。主イエス・キリストの恵みを益々知り、その恵みの内に生きる者であるように。私たちのためにへりくだり、十字架にまでご自身を献げて仕えてくださった主を知り、自らも感謝をもつ

てその主に倣う歩みへ進む者であるように。そしてその主を通して神の愛を益々深く知る者であるように。また聖霊の交わりに豊かに生かされる者であるように。この三位一体の神の福音にしっかり立つ時、私たちは最初に見た5つの勧めの通り、喜びに満ちた教会、回復へと向かう教会、慰め励まし合う教会、思いを一つにする教会、平和を保つ教会として歩むことができるようにされます。そのような歩みへと進んで、愛と平和の神がいよいよ豊かに私たちとともにいてくださるという祝福に生かされ、この神を証しし、宣べ伝える教会の歩みへとさらに導かれて行きたいと思います。